

名古屋まつりにジョン万次郎の子孫登場

札幌かに本家・日置会長が仲介役 「いろいろなご縁で人も世も動く」



日置達郎会長

創業50余年・新鮮なカニ料理とともに“動くカニ看板”で知られる全国13店を有する「札幌かに本家」（本店・名古屋市中区）。創業者の日置達郎会長（87）は今年10月、3年ぶりに開かれた「第68回名古屋まつり」の英傑行列の豊臣秀吉の母「大政所」役にジョン（中浜）万次郎の子孫の中濱京（なかはま・きょう）さん（58）＝天白区＝登場に一役買って話題を呼んだ。同まつりで過去に徳川家康役を演じた日置会長にそのいきさつを聞いた。

日置会長が中濱さんを知ったのは5年ほど前、本店（栄中央店・名古屋市中区栄3-8-28）近くにあった料亭「蔦茂」（社主/深田正雄氏）主催の勉強会で中濱さんがジョン万次郎（以下・万次郎）の講演を行ったことから。

中濱さんは東京生まれだが、2歳の時、医師だった父の転勤に伴って名古屋に転居。以来、名古屋で育ち、現在は富士通JAPAN東海支社に勤務する傍ら、直系5代目として万次郎の業績を伝えようと内外の講演会やイベントに参加している。

万次郎の生涯は、まさに疾風怒涛・波乱万丈だった。

1827（文政10）年、土佐国（現・高知県土佐清水市）の漁師の家の二男として生まれ、9歳で父を亡くし、幼い時から漁に出ていた。14歳の時にシケに遭い漁具も食糧も波にさらわれ、760km南東の孤島・鳥島に漂着。143日目に仲間とともに米国の捕鯨船ジョン・ハウランド号に救助された。当時の日本は

鎖国政策で、帰国も難しい状態。船長は万次郎を気に入り、ハワイで仲間4人を降ろしたものの米国に連れていった。名前も船名からジョン・マンという愛称に。米国で万次郎は船長に我が子のように育てられ、マサチューセッツ州で勉学にも励み学校を首席で卒業。捕鯨船に乗るため、航海術や捕鯨術を体得して帰国することを決意。丈夫なボートを買うためにゴールドラッシュで稼ぎその資金を得て、仲間の居るハワイへ。

1851（嘉永4）年、薩摩藩領の琉球（現・沖縄）に上陸後も、本土に移され薩摩藩や長崎奉行所の長期の尋問を受け、郷里の土佐に帰ったのは1852（同5）年。土佐藩主・山内容堂の知遇を得て、波乱の12年余の経験も公式記録され、流布される一方、高知城下の藩校の教授に就いた。後藤象二郎、岩崎弥太郎らも指導を受けたと言われている。その後、通訳として幕府からの招聘を受け帯刀も許され江戸に。ペリー来航で混乱する幕末、万次郎の処遇は安